

項 目	作 業 内 容
-----	---------

殖生長)が同時進行しており、両方のバランスのとれた生育をさせることが良品多収生産につながる。このため、生育に応じた肥培管理や着果負担の軽減等により、草勢管理に努める。



写真1 夏秋キュウリの栽培状況



写真2 ピーマンの収穫

主な野菜の追肥の目安は以下のとおりであるが、天候や生育の状況により、時期や量を加減する。また、根傷み等で根から養分の吸収ができない場合は、1,000倍程度の薄めの液肥で葉面散布を行う。

表2 主な果菜類の追肥施用の目安

	追肥開始の目安	追肥の間隔	1回当たり施用量
キュウリ	1番果収穫前	7～10日おき	N成分で 2～3kg/10a
ナス	1番果収穫始め		
ピーマン	1番果収穫始め		
トマト	1段花房の果実がピンポン玉大時(3段花房開花時)		
ミニトマト	3段花房開花時		

(3) キュウリの管理

キュウリの葉は、概ね展開後45～50日で光合成能力が低下するので、重なりあった古葉や病葉を適宜取り除く。1回の摘葉は株当たり1～2葉とし、下葉の3～4枚は主枝を摘心する頃までに摘葉し、株元への採光を良くする。

また、草勢の低下が見られる場合は、変形果や傷果などを中心にやや強めの摘果を行ったり、出荷規格の範囲内で若どりを行うなどして着果負担を軽減する。

病害では、多湿条件でべと病、炭疽病、褐斑病、つる枯れ病が発生しやすいので、排水、通風、採光をよくするとともに、病徴の早期発見に努め防除を行う。

項 目	作 業 内 容
<p>(4) トマトの管理</p> <p>(5) サトイモ (マルチ栽培) の追肥・土寄せ</p>	<p>トマトは強い光を必要とする野菜であり、降雨や曇天により光合成量が低下すると落花の原因となるため、適切なホルモン処理を行い着果促進に努める。</p> <p>降雨が続くと、疫病や軟腐病、葉かび病、灰色かび病などの病害が多発するため、ハウスの通風を良くするとともに、摘葉や腋芽除去は晴天日に行い、傷口からの病原菌の侵入を防ぐこと、花弁をこまめに除去するなどの対策を行う。</p> <p>サトイモについては、今後、施肥管理や排水対策等に留意し、急激な生育に対応した栽培管理が必要である。</p> <p>サトイモのマルチ栽培は、6月中旬頃を目安にマルチを除去し、追肥、土寄せを行う。1回当たりの追肥量は窒素成分で7kg/10a程度とし、8月中旬頃までにもう一度施用する。</p> <p>土寄せは、マルチ栽培では根がマルチの際まで伸長しているため、土寄せ時に根を傷めやすい。このため、作業はなるべく曇天時に行い、土寄せ後の夕方に適宜灌水する。</p> <p>土寄せする土の量(高さ)は、新葉が出てくる部分よりは低くするが、株元まで十分に行い、かまぼこ型でボリュームのある畝にする。</p>
<p>(6) 貯蔵用タマネギの収穫・乾燥</p>	<p>タマネギは茎葉が倒伏後も肥大するが、貯蔵性等を考慮し、茎葉が70~80%程度倒伏した頃に収穫する。晴天が続く日を選んで収穫し、葉の切り口を乾燥させてコンテナに7分目程度入れ、ハウス内に搬入する。腐敗球軽減のため、搬入後1~2週間は40~45で乾燥させ、その後は30~40で管理する。温度が50以上になると品質が著しく低下するので注意する。</p>



写真3 サトイモの土寄せ



写真4 機械収穫されたタマネギ

項 目	作 業 内 容
-----	---------

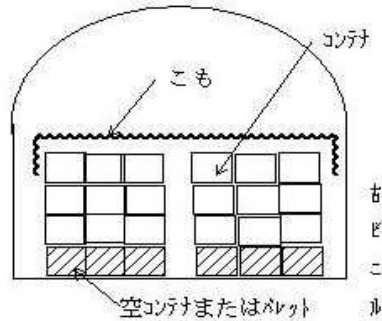


図1 タマネギの乾燥の例

(7) イチゴの炭疽病防除 (親株床、採苗床)

近年、イチゴの育苗において炭疽病が多発し、各地で問題となっている。この要因として、罹病性品種の増加、小型ポット育苗の普及に伴う密植育苗や灌水回数の増加、薬剤耐性菌の出現等が考えられる。炭疽病は、降雨や頭上灌水により罹病苗の周囲に孢子が飛散して感染が拡大する。

6月は親株床で採苗が行われる時期であるが、この時期は梅雨に当たり多雨であるため、炭疽病が蔓延しやすい条件と考えられることから、親株や子苗を含めた定期的な防除、および発病株の早期除去を徹底し、育苗床へ罹病苗を持ち込まないように注意する。

また、育苗床への炭疽病の蔓延を防ぐために、雨よけ底面給水育苗施設が有効である。



写真5 イチゴ炭疽病の病徴

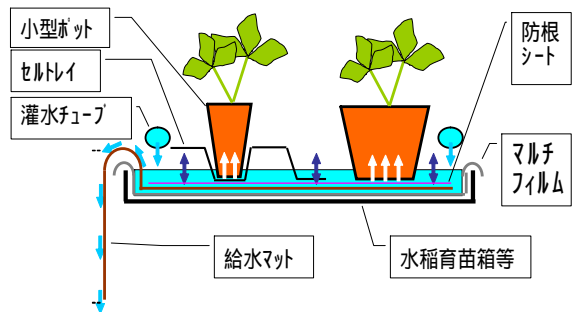


図2 愛媛農試方式底面給水育苗システム